

# 変わる教育委員会

《第600回》

## 三島村は日本の保健室①

鹿児島県・三島村教育委員会  
教育長 室之園晃徳



鹿兒島県薩摩半島の南端から約40キロの海に浮かぶ「竹島」「硫黄島」「黒島」。これらの小さな三つの島を合わせて三島村は構成されている。

## よつごそ 離島の村へ 三島村の山海留学

### 三つの島の村「三島村」

その名の通り竹に覆われた竹島、活火山の硫黄岳がそびえる硫黄島、そしてうっそうたる森林の島「黒島」。全く違う表情を見せて横に並ぶこれらの島は巨大噴火の痕跡で、「三島村・鬼界カルデラジオパーク」として認定されている。

人口は約380名。交通手段は週4便の定期船のみ。村役場や教育委員会は、島内ではなく鹿児島市にあるという特殊な行

政システムが敷かれた村だ。

隔離されているが故に、独自の文化や伝統、伝説等が語り継がれているが、農漁業にしろ観光にしろ、特に主幹産業と言えるものはないため、財政状況は厳しく人口は減少していくばかりである。この島を舞台にした『私は忘れない』（有吉佐和子著、『忘れられた島へ』（長崎源之助著）などの小説があるが、このままでは本当に忘れられた島になってしまおうという危機感が常にあるのは否めない事実だ。

それでも今、この村を元気にしているのは学校であり子どもたちだ。人口減少の激しいこの村に4つの義務教育学校と80名の子どもたち、50名の先生たちがいる。つまりこの村の3分の1以上は教師と児童生徒ということになる。このような極端な人口比率の町村は恐らく全国どこを探してもないであろう。なぜこの厳しい状況の中で学校が存続できているのか。それは、村が長年取り組んできた山海留学のお陰である。

### 子どもで村が息づく

平成元年の児童生徒数は、4つの学校を合わせて42名。このままでは、遅かれ早かれ学校は閉校になるという状況に追い込まれていた。そこでこの状況を打開するために平成9年度から取り組んだのが山海留学。この24年間で児童生徒数はほぼ倍増し、平成以降最も多い。児童生徒増に伴い、教師も増えて、高齢化していた島が活気づく。まるで子どもたちに与えられた特別なパワーが大自然のエネルギーに息を吹き込むようだ。

「離島教育は教育の原点」ということをよく言われるが、島の子どもたちや山海留学生を見ると、村は国の縮図であるというのを感じる。子どもたちの抱えている問題はつながっている。山海留学はこの国の教育課題を解決する有効な手立ての一つとなり得るのではないか。離島教育・山海留学の実態、その効果や課題を、本シリーズを通して紹介していきたい。

# 変わる教育委員会

《第601回》

## 三島村は日本の保健室②

鹿児島県・三島村教育委員会  
教育長 室之園晃徳



三島村の入り口の島「竹島」

子どもたちが親元を離れ、農山漁村の受け入れ家庭（里親）の元で暮らし、地域の小中学校に通う「山海留学」。三島村では全国各地から山海留學生を受け

「多様性」を受け入れる

みんな

しなやかに

まなび合う

けられており、その数はこの制度が始まってから24年間で延べ300名を超える。

全国から集まっているのは子どもたちだけではない。村が推進している「定住対策促進事業」で各地から移住してきた人たちもだんだんと増えてきており、旧地元人と新地元人との逆転現象が進みつつある。少ない人口の村においては、個人や集団間

に存在する様々な違い、多様性が全体に及ぼす影響は大きい。大都会東京の「ダイバーシティ」社会は、この小さな三島村においても同様であり、「ダイバーシティ」を生かすことが今後の村づくりの重要な鍵だ。

みんなが「しなやかに」

特にゆかりもない離島の小さな村に、どうして山海留學生として子どもたちが留学してくるのか。その理由は様々であるが、親元を離れてたくましく成長してほしいという気持ちは共通しているし、それぞれが何らかの克服したい課題をもっていることもまた共通している。

移住してきた方々の動機や理由もそれぞれであり、元々の地元住民と新しく入ってきた住民、山海留學生、そして離島教育のために赴任してきた先生方など、様々な思いや生き方が多種多様に混在している。

だからこの多様性の村でみんなが共存共栄していくために必要な資質は、「しなやかさ」だ。

「しなやか」とは、弾力があって柔軟なさまであり、考えや対応が柔軟なさまである。多様性を尊重する地域社会にするために必要なことは、しなやかに変化を受け入れる土壌づくりだ。

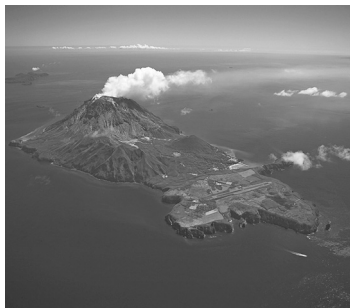
しかし、村社会は一般的に閉鎖的、排他的であるといわれる。そのような村社会に、多様性を受け入れたり、それぞれの違いを肯定的に認めたりといったポジティブな発想の転換が受け入れられるのか。山海留學も定住対策もこの課題と向き合いながら、寄せては返す波の如く行ったり来たりの繰り返しの中で、少しずつ根付いてきて現在に至っている。まだまだ発展途上ではあるが、島民の山海留學に対する評価は高い。それは、山海留學が島に与えている大きな効果を島民一人一人が感じているからにはほかならない。留學生を取り巻く教師や子どもたち、そして地域の人々全てがしなやかさを身に付けることで留學制度が存続し、多様性を受け入れる土壌が育まれてきている。

## 変わる教育委員会

《第602回》

### 三島村は日本の保健室③

鹿児島県・三島村教育委員会  
教育長 室之園晃徳



三島村の真ん中の島「硫黄島」。火山と伝説に彩られた島。

# オンラインワンの学び

## 〇〇ならではの教育

鹿児島県には、大小様々な離島があり、そこには200校余りの小中学校が存在する。その多くは小規模校であるが、児童生徒数の減少は離島に限ったこ

とではなく、県本土も含めて地方の抱える共通した大きな問題となっている。そのため多くの町村が、少人数指導によるきめ細かな教育や特色ある教育活動を「〇〇ならではの教育」としてアピールし、山海留学制度を推進することによって学校や地域の活性化を図ろうとしており、鹿児島県の山海留學生の受入人数は全国で最も多い。

それぞれの地域のユニークな特色がネーミングにも生かされている。例を挙げると、ウミネコ留学、ほしぞら留学、宇宙留学、かめんこ留学などなど、名前から地域の特徴が伝わってくる。各地域ならではの各地域でしか触れることのできない「ひと・もの・こと」を学習素材として積極的に取り入れる、つまり地域の教育力を発掘し活用することは、様々な学習効果を発揮し学びを豊かにする。

## 三島の個性を強みに

我が三島村は「しおかせ留學生」と銘打って取り組み、他がマネできない個性をさらに強みとして進化できるよう努力している。

例えば26年間続いているアフリカの民族打楽器「ジャンベ」の演奏やギニア国との交流。また、義務教育学校に再編成した際、小中一貫で学ぶ教科として「地球（ジオ）科」を創設した。三島村が日本ジオパークに登録されていることを最大限に生かし、環境教育、SDGs、防災

教育、コミュニケーション教育などを通して、問題解決能力の育成や自己の生き方の自覚を深める学習を展開している。

そして、特色ある教育としてさらに力を注いでいるのが遠隔教育システムである。オンラインでつながることで学習の可動域が大きく広がった。かつては大型の専用機器が必要でコストも高く、使用場所も限定されていたというイメージがあり、財政状況の厳しい村では容易に取り組めないという先入観があった。しかし、現在はネット環境とパソコン、タブレット端末などがあればシンプルにオンライン授業をすることができる。これまで交通事情により、島と島との交流はできない状況があったが、気軽に「遠隔交流学習」や「遠隔合同学習」ができるようになり、多様な学びはもたらんこと、4つの学校の絆も深まるという効果も感じている。

ハンデいの多い離島の村に興味をもってもらうためには、魅力的で個性的な教育が必要だ。

# 変わる教育委員会

《第603回》

## 三島村は日本の保健室④

鹿児島県・三島村教育委員会  
教育長 室之園晃徳



三島村の3番目の島「黒島」  
うっそうたる森林の島

# 山海留学の教育力

## 現代社会の大きな課題

増え続ける不登校や引きこもりは、現代の教育が抱える大きな課題であり社会問題である。各種調査を見ると、そのきっかけは「無気力」「友人関係」「学業

不振」「いじめ」「家庭環境」など様々だが、現代社会が抱える問題が複合的に絡み合い、原因・理由は千差万別だ。だからその背景にある問題を指摘することはできても、直接間接に絡み合った固いもつれはかなり強烈で、解決にはつながらない。今は年々増加しているこの問題を、ただ傍観するしかない状況が続いているだけの気がする。

## 山海留学で変わる

山海留學生の動機は様々だが、本村の場合、その9割は不登校傾向にあった子どもたちである。「都会や町の大きな学校では、集団に溶け込むことができずに伸び伸びと学校生活を送ることができない。でも自然豊かな村の小さな学校であれば、自分らしさを発揮して成長できるのではないか」そんな期待をもつて留学して来ているが、実際、その期待に込めることができるのが山海留学であるということを実感している。村に留学してきた子どもたちが、どんどん元気にしているからだ。かつては学校に行きづらかったなどは少しも感じさせない。子どもたちはそれぞれに合った環境さえ与えられれば、自分自身で育つ力を授かっているのだ。

一つ一つの小さな蕾たちは、個性豊かであるが故、一律にどんな環境でも育つわけではない。だからどうしても今の環境で蕾が開かないのであれば、思い切って環境を変えてみることもだ。刺激と変化に満ちた都会で育った子どもたちにとっては、コンビニも信号もない、「自然しかない」島は、逆に刺激的かもしれない。機械的な刺激に慣れなかった子どもたちの五感センサーの感度が、大自然の新たな刺激によって上がり、感動する心や豊かな感受性が呼び覚まされる。もちろん自然環境だけではなく、人間環境も大切な要素である。教師と児童生徒、異年齢の子どもたち、地域の大人たち、高齢者、それぞれの関係が密接で優しく温かい。子どもの自律的な成長を促す要素が、地方にはいっぱい詰まっている。

「三島村は日本の保健室ですね」ある人がそう表現した。最初はピンと来なかったが、ちょっと頭をひねって「なるほど」と合点がいった。少々大げさではあるが、言い得て妙かもしれない。ただし、そのような町や村は、日本の地方にたくさんあるに違いない。



## 変わる教育委員会

《第604回》

### 三島村は日本の保健室⑤

鹿児島県・三島村教育委員会  
教育長 室之園晃徳



中学生によるアフリカの太鼓ジャンベの演奏（県中学校音楽コンクール16年連続金賞）

## 都会と地方を結ぶ山海留学

### 教育と文化の薫りを

人口わずか400名足らず。財政も日本で最も脆弱。交通、産業、観光の発展も厳しい離島の村。それでも有人国境離島に指定された、島国日本をカタチ

づくる国土の大切な一部である。このような離島の村や地方の小さな町を守っていくことが、国の発展には絶対に必要だ。

しかし、自主財源も乏しく、ふるさと納税の返礼品もままならない村は、交付税でやりくりするしかない。せっかく島に赴任していただいた先生方の住宅や学校の改修・補修も、要望通りに進まないのが現実である。

このように「金がなければ知恵を出せ」しかない現実の中でできること、それはこの村を「教育の島」として進化させることだと考えている。幸いにもこの村にはユネスコ無形文化遺産に登録されるような、貴重な伝統文化や数々の伝説が残されている。さらには日本ジオパークに認定されている豊かな自然。長年取り組んできたアフリカの太鼓ジャンベを通じたギニアとの国際交流。「教育と文化の薫り」漂う村づくりは、先人たちから継承した島の品格を高め、村民の誇りを呼び覚ます。

また、現在特に力を入れている遠隔教育システムによる日々のオンライン授業は、魅力ある教育づくりに弾みをつけている。中でも今年5月、天皇皇后両陛下と三島村の子どもたちとのオンラインによる懇談が実現したのは誠に僥倖であった。継続は力となり、続けることが大きな幸運を呼び寄せる。特色ある教育による付加価値が、山海留学の効果をさらに高めていく。

### ワインウインの関係構築

本村の山海留学は、県・村の補助があるため実親の負担は少なく、経済的に厳しい家庭の子でも可能だ。何よりも子どもたちは元気に学校に通え、学力も個別指導で確実に向上できる。

一方、人口流出が止まらない町村にとって学校の存続による地域の活性化は、一時的ではなく将来的にも関係人口の確保など多彩な村づくりの展開が期待できる。つまり親と村のウインウインの関係を通して、国の教育問題の解決に貢献できるのだ。決して明るい話だけではない。大なり小なりトラブルも多いが、切実な問題である里親の確保については、多人数の受け入れ可能な寮の取組を始めた。

今後、全国のネットワークづくりを進め、情報を交換・共有して、この制度を充実・発展させていきたい。山海留学の効果がもっと認識され、有効な教育スタイルの一つとして、さらに広がっていくことを期待している。